慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゲーテの『ファウスト第一部』の「夜」の場面の冒頭でファウストの語るJuristereiをいかに解釈すべきか
Sub Title	Abschied von meinem Freund Masato Izumi
Author	岩﨑, 英二郎(Iwasaki, Eijirō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.109, No.2 (2015. 12) ,p.214- 218
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	和泉雅人教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01090002-0214

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲーテの『ファウスト第一部』の「夜」の場面の冒頭でファウストの語るJuristereiをいかに解釈すべきか

岩﨑　英二郎

最初にまず、これまで日本で出ている『ファウスト第一部』の訳本で、この箇所がどのように訳されているかを検討してみよう。これについては、畏友中島悠爾さんと、慶應独文の長年の仲間、斎藤太郎君に一方ならぬお世話になったが、拙論を述べる前に、まず大正の初期から平成の現在にかけて出版されている当該箇所の翻訳を、年代順に列記しておこう。

「嗚呼今我や既に哲學をも、法學をも、醫學をも、而して又哀しい哉や神學をも熱烈なる精苦もて詳細に學びぬ。而して又可哀なる愚物や、今此に立つに、露ばかりも前より智くは成らぬ也。」（高橋五郎訳、１９１３年）、「はてさて、己は哲學も法學も醫學もあらずもがなの神學も熱心に勉強して、底の底まで研究した。さうしてここにかうしてゐる。氣の毒な、馬鹿な己だな。その癖なんにもしなかった昔より、ちっともえらくはなってゐない。」（森鷗外訳、１９１３年）、「ああ、さてさて！　哲学や法律学や、また医学　残念なことには神学までもすっかり熱心に骨を折って学んだ！　今にぼんやりしているこの馬鹿、賢さは昔と少しも違わぬ。」（向軍治訳、１９１３年）、「あゝ僕は非常な勉強をして哲學、法學、醫學、夫れに悲哉神學までも學び盡した。然るに昔日と些も変る（町井正路訳、１９２１年）、「嵯乎おれは最う哲學も、法理論も醫學も、そして、なまじひに神學まで心に努力して隅もなく研究した。然るにおれはこゝに斯うしてゐて、哀れなるおれの馬鹿が！賢こさは以前と變りがない。」（東新訳、１９２２年）、「哲學も、醫學も、法律學も、その上残念乍ら神學まで、随分熱心におれは徹底して勉強したものだがなあ。しかも前より悧巧になってさへゐない。」（秦豊吉訳、１９２７年）、「扨ても、あゝ俺は哲學だの、法律學だの、醫學だの、

それからおまけに神學だのと熱心こめて研究した。そして斯(こ)うやってゐるのだが、みじめな馬鹿の俺ではないか、以前に比べ、どれだけ悧巧(りこう)になってゐるのだ！」（中島清訳、１９２７年）、「哲學も、醫學も、法律學も、その上残念乍(なが)ら神學まで、随分熱心におれは徹底して勉強したものだがなあ。それにおれはこゝにかうしてゐる。實に氣の毒なばかなおれだ。しかも前より悧巧(りこう)にさへなってゐない。」（秦豊吉訳、１９２７年）、「今あゝ！哲學　法學と醫學と　悲しむべし、神學をも心をこめ、學び盡しぬ。あはれむべし、こゝに立つ我　前のまゝなる愚かさを！」（三井甲之(こうし)訳、１９３０年）、「ああ、おれは哲学も法学も医学も、いまいましいことには、役にもたたぬ神学まで、骨を折って、底の底まで研究した。そのあげくがこのあわれな愚かなおれだ。以前にくらべて、ちっとも賢くなってはいない。」（手塚富雄訳、１９３９年）、「はてさて、俺は哲學も、法學も医學も、よせばよいのに神學まで熱心に励んで奥義を究めてみたが、かうしてゐるていたらくは阿呆(あほう)も同様で、昔に比べてちっとも賢くなってゐない。（櫻井正隆訳、１９４３年）、「あゝわしはこれで哲學も法律學も醫學も　あらずもがなの神學まで熱心に骨おって研究しつくした。その擧げ句がこの通り哀れな愚かものだ。前よりちっとも賢くってはいない。」（１９４６年、高橋健二訳）、「あゝ、今が今まで、哲學も、法學も、醫學も、口惜しいことに神學迄、熱心籠めて辛苦して、殘る隈(くま)なく研究した。そうして此處にこうしてゐる、可哀そうな馬鹿の俺だわい！おまけに昔よりちっとも利口になって居ないと來る。」（阿部次郎訳、１９４７年）、「かうして、俺は、あゝ！　哲學を、法律學を、医學を、残念ながら神學までこころを燃やして、ひたすら學びつくした。昔より、少しでも利口になったか。マギステルと名乗り、ドクトルとさへ名乗って、やがて十年といふもの、上へ、下へ、やみくもに、弟子どもの鼻づらをひき廻しはしたが――さて、おれたちには何ひとつ解けないものと見える！　思えば、この胸を焼かれるやうだ。（久保栄訳、１９４８年）、「ああ！　おれは、哲学も、法学も、医学も、それによけいなことに、神学までも、一所懸命勉強して、究められるだけきわめた。だが、情(なさけ)ない！ばかなおれは、このとおり、以前(むかし)にくらべて、すこしも賢くなっていない。」（井上正藏訳、１９５１年）、「ああ、これでおれは哲学も、法学も、医学も、また要(い)らんことに神学までも、容易ならぬ苦労をしてどん底ま研究してみた。それなのにこの通りだ、可哀そうにおれという阿呆が。昔よりちっとも利口になっていないじゃないか。」（相良守峯訳、１９５８年）、「哲学も、法

学も、医学も、そして、よけいな神学までも、一生けんめいになっておれは研究した。思えば、何という馬鹿げたことだろう。ここにこうしたまま、おれはちっとも賢くなっていない。」（大山定一訳、１９６０年）、「ああ、おれは、哲学も、法学も、医学も、口惜しいが神学までも、熱心に勉強して、底の底まで究きめてきた。それなのに、このとおり、このあわれな愚か者は、以前とくらべていっこう利口になっておらぬ！（佐藤通次訳、１９６７年）、「いやはや、これまで哲学も、法律学も、医学も、むだとは知りつつ神学まで、営々辛苦、究めつくした。その結果がどうだといえば、昔に較べて少しも利口になってはおらぬ。」（高橋義孝訳、１９６７年）、「ああ、これまでおれは、哲学から法律学、さらに医学、そのうえ無用の神学までもとことんまでねじり鉢巻きで勉強してきた。それだのに、此れこと通り、哀れな間抜けのとんま、さっぱり利口になっていないおれさまだ！」（山下肇訳、１９９２年）、「なんたることだ、ああ！ やれ哲学だ　それ法学だ、医学だ、と手をひろげ、余計なことに神学まで、悪戦苦闘して究めぬいた。まこと、あわれな愚か者よ、このおれは、ちっとも利口にならなんだ！」（小西悟訳、１９９８年）、「ああ　哲学は言わでものこと　医学に加えて法律学　無駄なことに神学までも　胸を焦がして　学びぬいたが　今ここにいる　この阿呆は　昔と同じ阿呆のままだ！」（柴田翔訳、１９９９年）、「なんてことだ。哲学をやった、法学も医学もやった。おまけに神学なんぞも究めようとした。しゃかりきにやってきた。ところがどうだ、いぜんとしてことのとおりの哀れなバカときている。ちっとも利口になっちゃいない。（池内紀訳、１９９９年）、「なんたることだ！おれはきわめつくしたのに。哲学、法学、そして医学。おまけに神学までも。すべてじっくりと研究しつくした。燃えるような熱意で、つらい勉強をやりぬいたのに。」（荒俣宏訳、２０１１年）、「ああ、俺は哲学も、法学も、医学も、おまけに神学までも、熱心に、とことん研究したが、馬鹿な俺は、最初の頃と変わらず何も分かっていない。」（和田孝三訳、２０１２年）、「あゝ、今が今まで、哲學も、法學も、醫學も、口惜しいことに神學迄、熱心籠めて辛苦して、殘る隈なく研究した。そうして此處にこうしてゐる、可哀そうな馬鹿の俺だわい！おまけに昔よりちっとも利口になって居ないと來る。」（阿部次郎訳、１９４７年）。

大正、昭和、平成と、三代の帝のもとに百年もの時が流れ、最初の「學びぬ」と池内訳の「やった」を比べてみると、その間に日本語もずいぶん下品になった

ものだが、肝腎の Juristerei にかぎっては、いずれの訳も「法学」ないし「法律学」、「學」か「学」かの違いこそあれ、「いずれも同じ秋の夕暮」である。

それではいよいよ本題に移ろう。「法学」にせよ「法律学」にせよ、Juristerei をそのように訳したのでは、ゲーテの意図に反する、というのが拙論の趣旨であるが、話はすこぶる簡単、「法学」ないし「法律学」をドイツ語では何というのか、というところから始めればいいだけのこと。本来のドイツ語では Rechtswissenschaft だが、ゲーテ自身が Juristerei と言っているのだから、Jurisprudenz ないし Jura といったほうが話も早いし、事実、いまから六十年ほど前のこと、筆者がドイツに留学していたときのドイツの学生たちも、ごくあたりまえのように Jura とか Jurist とかと言っていたと思う。

そこで結論だが、「法学」は Jura、「法学者」ないし「法律家」は Jurist、したがって「法学」や「法律家」などを蔑視的、否定的に表現したければ Juristerei となることは理の当然である。Anbeter が Anbeterei に、Bergsteiger が Bergsteigerei に、Faschist が Faschisterei に、Masochist が Masochisterei に、Politik が Politikerei に、Quatsch が Quatscherei に、Sportler が Sportlerei に、Teufel が Teufelei に、Verbot が Verboterei に、Werwolf が Werwolfereiに、Zauber が Zauberei に等々、枚挙に暇(いとま)なしであるし、Beethoven から Beethovenereiを、Böll から Böllereiを、Fontane から Fontanerei を、Hegel から Hegelei を、Heidegger から Heideggererei を、Hitler から Hitlereireを、Mozartから Mozarterei を、Schopenhauer から Schopenhauerei を、Stalin から Stalinereiを、Strauß から Straußereiを、Thomas Mann から Thomas-Mannnerei をなどなどのように、固有名詞にすらみられる。ついでに言えば、Hegelei はヘーゲルを誹謗するためのショウペンハウアーの造語だったと言われている。

最後に、これはいわば駄目押しだが、ゲーテ自身が Jurist という言葉を使っていたことを確かめる必要がある。これについては我が国におけるゲーテ研究の泰斗ともいうべき木村直司さんの教えを乞うたのだが、ゲーテがまだ四十台のころに書いた未完の戯曲 Die Aufgeregten の第一幕、第三場に、外科医 Breme の言葉として、Der Theolog befreut dich von der Sünde, die er selbst erfunden hat; der Jurist gewinnt dir deinen Prozeß und bringt deinen Gegner, der gleiches Recht hat, an den Bettelstab; der Medikus kuriert dir eine Krankheit weg, die andere herbei, und du kannst nie recht wissen, ob er dir genutzt oder geschadet hat: der Chirurgus aber befreit dich von einem reellen Übel, das du dir selbst zugezogen hast oder das dir zufällig und

unverschuldet über den Hals kommt; er nutzt dir, schadet keinem Menschen, und du kannst dich unwidersprechlich überzeugen, daß seine Kur gelungen ist. とある。冗長としか形容できぬ、いや、むしろ悪文というべきか。

最後にもう一言。上に「法学」や「法律家」などを蔑視的、否定的に表現したければ、と書いた以上、そのためには Juristerei をどう訳せばよいのかの具体案を提示しなければ無責任というものだろう。とりあえずの私案にすぎないが、「たかが法律学」とか、「法学くんだり」とか、同学の弟子寺田雄介君が薦めてくれた風情(ふぜい)を用いた「法学風情(ふぜい)」とか、「たかが法学風情(ふぜい)ごときに」などなど、あれこれ考えられるのではなかろうか。